

胡 華喩

(東京大学大学院)

「元末汪克寛における「継春加王」に関する言説の捉え方」

「継春加王」という語は、『春秋』にある「春王正月」という経文から生み出された経学上の解釈問題であり、南宋の高宗(1107-1187)以降、胡安国(1074-1138)の「夏時冠周月説」によって覆い隠された古い議論である。本研究では、元末知識人にとって、この解釈問題はどんな問題であったのか、について論じたい。具体的には、汪克寛(1301-1372)の注釈整理のあり方を手掛かりに、十四世紀において、「一王法」の意味に対する認識の変化を中心に、知識人が孔子の『春秋』の筆法を「夏に従う」ことから、「周に従う」ことに捉え直した過程を捉えたい。

汪克寛は、十四世紀徽州の知識人であり、その『春秋胡伝附録纂疏』(以下『纂疏』と略称)は、1415年に明の成祖(1360-1424)の命で編纂された『春秋大全書』の底本として広く知られる。清初の知識人である納蘭性徳(1655-1685)は、氏の注釈は「羽翼往説」であると評した。汪克寛は基本的に程頤(1033-1107)の言説に基づいているが、実際、注釈の素材を通じて旧説の区分・整理を選定している。本研究では、胡安国の経学を集大成するものではない『纂疏』に、汪克寛による注釈整理という手段が見えることを示したい。

研究の内容としては、以下の三点に重点を置く。まず、「春王正月」の解釈は宋代の端平年間(1234-1236)を境にして「大受命(受命をととおぶ)」から「明僭(僭を明らかにす)」に変化した。にもかかわらず、『纂疏』は「明僭」の言説を引き継がなかった。次に、十四世紀における他の『春秋』注釈書と同様、『纂疏』には朱熹(1130-1200)の四伝の弟子である、呂大奎(1230-1279)の言説を引用しなかった。そして、汪克寛と同時に生きていた福州の『春秋』注釈者、張以寧(1301-1370)が賦した「送李遜学献書北上」を手掛かりに、地域における当時の知識人の政治参加を示す。

以上、本研究では「唯一の王法」ではなく「整えた王法」に取り組んだ、元末明初の理念的な「周」の形成のあり方に焦点を当て、経学の面において、その特徴を描き出したい。